

重要文化財 玉若酢命神社

隠岐国の歴史を秘めた



律令時代、隠岐は都から遠く離れた離島でありながら一つの国に位置付けられ、国府がおかれていました。隠岐の惣社玉若酢命神社の社家、億岐家に代々伝わる「駅鈴」は隠岐国の証であり、「国に非常大事が起きた時駅使飛報の証として」、「国司が朝集使として上京の時、徴用の証として」使われたものです。

国府は、隠岐の島町下西の台地にあり、赴任した国司の最初の仕事は、隠岐の氏神を順拝することでした。けれども、辺鄙な隠岐での順拝は難しいため、国府そばの玉若酢命神社に国中の氏神を集めて惣社にしたそうです。これを神事としたのが毎年6月5日に執り行われる「御霊会風流」です。

東郷・飯田・大久ほか8地区の神馬が神社の参道を、人馬一体となって猛スピードで拝殿まで駆け上がるその姿は、畏敬の念すら感じさせます。

寛政5年（1793年）に建てられた玉若酢命神社の本殿は、正面に茅葺の切妻屋根をみせる規模の大きな建築物です。隠岐造りの代表的な建物で、伊勢神宮の神明造りに加え、屋根は出雲大社の大社造り、庇は春日大社の春日造り、随神門は通路をはさんで、左右に向かい合わせて二体の像を安置する、隠岐でよく見られる形式です。また、本殿や随神門に関わる普請文書等の史料がよく残っていたため、当時の造営の様子が伝えられています。

隣接する億岐家住宅は享和元年（1801）に建てられたもので、身分や用途によって分かれる入り口が三つある他、神棚をまつ「神前の間」や「ミソギベヤ」を持つなど、隠岐の社家としての特徴を持っています。また、幕末に起きた隠岐騒動の時に付けられた刀傷や弾痕を大黒柱に見ることができ、歴史的一幕を遺しています。また、神社境内の天然記念物八百スギは樹齢千数百年ともいわれ、樹高約30m、胸高周囲11mは国内でも有数の巨木です。

巨樹や社、社家が一体となった玉若酢命神社の風景は、長い年月に培われた重厚さを醸し出しています。

■位置図



重要文化財「玉若酢命神社本殿」
本殿は隠岐造りと言われる隠岐独特のもので、随神門とともに重要文化財に指定されている。



重要文化財「億岐家住宅」
享和元年（1801）建築。玉若酢命神社の宮司を代々務める億岐家の住まいである。（個人宅のため屋内は見学不可）



重要文化財「随神門」
通路をはさんで左右に向かい合わせて二体の像を安置する随神門の右奥が史跡名勝天然記念物「八百スギ」。



島根県指定無形民俗文化財「玉若酢命神社御霊会風流」
玉若酢命神社は隠岐国の惣社で、隠岐の国司が隠岐中の神社にお参りするかわりに神々を神社に集めた。そのとき神々が馬に乗って参集されるということから「馬入れ」の行事が行われるという。